

見えないものへの想像

東京都立目黒高等学校

松村 奈苗

私の暮らす日本では今、税金は「嫌われ者」だ。そしてその背景には、SNSなどで見た自分の都合の悪い情報に反発する心理が関係していると思う。しかし、本当に税金は私たちの敵なのだろうか？税金の使い道についての正しい情報についての知識が不足していれば、日常で出会うモノが税金によってできているということ、さらには自分の命が税金によって救われ支えられていることに気づくことができない。この状況が、税には負の側面しかないという考えを招き、今現在の社会が抱える税金へのイメージに繋がっているのだと感じる。

私は14歳の時突然アトピー性皮膚炎を発症し、日常生活もままならない程に病状が悪化した時期がある。当時はまだ明確な治療法がなく、我慢をすることで痒みと痛みに耐え凌ぐ日々だった。中学校に十分に通えず、私は諦めと希望の狭間で揺れていた。そんな時、両親が私に「あの温泉でなら治療ができるかもしれない」と言った。場所は北海道の最北端にある豊富温泉で、さらに一ヶ月ほどの滞在が必要だったため、家庭にかかる費用の負担に東京住みの私は1度、治療を躊躇った。慎重になる私に、両親は続けて「税金で補助をしてもらえるんだ。治したい気持ちは守ってもらえるんだよ。」と伝えてくれた。制度について調べてみると、「慢性疾患の保養施設利用費の補助」「湯治事業」と言い、宿泊費や経費を自治体で補助してもらえるものであった。それまでアトピーは1人で向き合い闘う病気だと思い込み引きこもっていた私にとって、この制度は未来に希望を持つことを許されたような、大きな救いの光のように感じられた。その気持ちは今でも鮮明に覚えている。

私はこの経験を通して、税金は人が生きる救いとなる力をもつと同時に、自分が無知であることの怖さを知った。もしあの時突然病気を発症していなければ、今SNSで休む暇もなく流れてくる税に対しての批判に、知らず知らずのうちに染まっていたかもしれない。税金は医療だけではなく、道路や学校、公共施設にも使われている。しかし、そうした事実を知らずにいることは、税だけでなく税の使い道すらも「見えなく」させてしまう。だからこそ、税の役割や使われ方を正しく理解し、目に見えない部分も想像をすることで考える力を持つことが、今私たちに求められていると強く感じた。私は将来、自分があの時税金によって生まれた制度に救われたように、未来の社会で何かの病気と1人で闘っている人の希望になることを「想像」して税金を納めたいと強く願っている。